



信州大学理学部同窓会報

会報31号

信州大学理学部同窓会
発行日 2018(平成30)年 2月 28日
発行責任者 森 淳
松本市旭3-1-1 信州大学理学部内
e-mail : rigakudou@shinshu-u.ac.jp

それぞれの進路選択

理学部長 市野 隆雄

学部、大学院の卒業生、修了生のみなさん、ご卒業、ご修了おめでとうございます。ご家族の皆様方にも、心よりお祝い申し上げます。幾多のハードルを乗り越え、晴れて卒業・修了の日を迎えられたことに、改めて敬意を表します。

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。信州大学は全国区の大学です。特に理学部の入学者は、例年、80%ほどが県外出身者で、北は北海道から南は沖縄まで、ほんとうにいろんな地域から学生さんが集まっています(教員もそうです)。これからの数年間、多様な人との出会いを楽しんでください。

信大生の真骨頂(?)

さて、1月13日付け朝日新聞『窓』の欄に「ひなちゃん一人で行けたね」という記事が掲載されました。信大生が、ダウン症の小学4年生の女の子、ひなちゃんのバス通学を見守っているという話です。11月末、信州大学の掲示板に「バス乗客のふりをして見守っていただける方を募集しています」というポスターが貼られたとのこと。ひなちゃんのお母さんが、「これまでは車で送迎してきたけれど、週に1回、1人で通学する練習を始めたい。親がこっそり見守りたいけど、気づかれそうだし、乗り継ぎもあるバス通学が心配なので」と貼ったもので、それに1人の信大生が手を挙げました。さらに仲間に声をかけたところ6人の学生が集まり、交替で養護学校までの路線バスに同乗し、そっと見守っているとのこと。

こういうあたたかい気持ちになる出来事、そして無私な態度は、信大生共通のものだと頃頃から感じています。また、仲間に声をかけて協力の輪を広げて実行するネットワークの軽さすばらしい。そういえば数年前には、信大思誠寮の学生が地域の消防団に入団し、消火栓のまわりの雪かきをしているという話題もありました。地域社会の中で、学生にでもできること、学生だからできることがあり、それを当たり前になってしまう行動力は、信大生の特質かもしれません。地域貢献度No.1大学としての真骨頂ここにあり、というところでしょうか(今年No.2だったそうですが・・)。

大学院進学にメリットはあるか

さて、もうかれこれ40年近く前ですが、私が学生だった頃は、大学といえば学部の4年で卒業するというのが普通で、院進学者はそれほど多くはありませんでした。しかし、最近では、大学院の修士課程へ進んで2年、あるいは博士課程まで進んでさらに3年、勉学を続ける人が増えています。これは単なる流行(はやり)なのでしょうか、それとも大学院へ進学するメリットが本当にあるのでしょうか。

そもそも、大学院へ進むよりも学部卒のほうが、早期に社会に出ることで実務経験を多く積むことができます。また、人生設計を2年早く組み立てることもできます。何よりも、高い学費を2年余分に支払わずに済みますし、早く就職して給与を得ることができます。

信州大学理学部では、学部卒者の35~50%ほどが修士課程へ進学しています。「はやり」に影響されて進学した人も、よくよく考えて進学した人もいるのだと思います。では、修士課程を修了した人たちの進路はどうなのでしょう。私の研究室(進化生態学)のOB、OGの中には、学部卒で活躍している人たち、博士を修了して研究者になっている人たちももちろんいますが、ここでは特に修士修了生に絞って具体例を紹介します。

自治体に就職したA君の場合、修士2年間のフィールドワークの経験を買われてか、環境保全課に当初から配属され、専門に近い保全分野の仕事を任されています。最近では生物関連のシンポジウム開催を担当するなどしています。修士修了者のキャリアパスの特徴は、彼のように、採用後に修士での専門性を生かした部署へ配属されたり、あるいは最初から研究・開発・技術職として採用されることが多いことです。

高校教員に採用されたS君は、生物部の顧問をしています。生徒が行っているグループ研究のテーマには、彼の修士課程時代の経験やノウハウ、アイデアが色濃く反映されているようです。これからの高校教育で重視される「課題研究」や「理数探究」では、彼の本領がいっそう発揮されることでしょう。

鳥獣保護管理のベンチャー企業を立ち上げたT君の場合、修士在学時に、日本生態学会の全国大会で鳥獣保護

についての小集会をオーガナイズしました。その経験や人脈が、彼の現在につながっています。

一方、専門とは異なる分野に進んだKさんは、大学時代の仲間とともに松本でゲストハウスを運営しています。彼女は、今しかやれないことを思い切りやりたい、と学部と修士の3年間、乗鞍岳でハードなフィールドワークをおこないました。ゲストハウスの宿泊者には外国人やバックパッカーが多いようですが、「山岳域を歩き回った自分の経験が、彼ら彼女らとの交流に生きています」と話してくれました。

もちろん、院修了者と学部卒者に、大きな違いがあるわけではありません。2年間の経験のメニューが違っただけです。そのことを、どのようにとらえるか、メリットデメリットだけではない、本人の選択の基準がそれぞれ

あるのだと思います。

理学部では、2年前から「理学部進路説明会」を学部生向けに開き、学部長室のメンバーが大学院進学のメリットなどについて話しています。毎回100人以上の学生が熱心に耳を傾けてくれています。今年も4月初旬に開催予定です。自分でリサーチし、自分の頭で考え、他者との議論をふまえて論文に仕上げていく力が、修士課程の2年間で確実に積み上げられる、そのことを学部生のみなさんに伝えていきます。

以上、理学部の一端について紹介させていただきました。同窓会会員のみなさま方には、理学部の維持発展のため、今後ともいっそうのご支援、ご指導をよろしくお願いいたします。

学 長 挨拶

濱田 州博

日頃より信州大学理学部同窓会の皆様には、一方ならぬご支援、ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。まずは厚くお礼を申し上げます。

平成になってから30年目を迎えました。私自身に関しては、1988年、昭和63年の6月に信州大学に赴任しましたので、今年の5月末でちょうど30年間信州大学にお世話になったこととなります。平成のすべてを信州で過ごしてきましたので、何となく感慨深いものがあります。1988年の出来事を調べると、青函トンネル開通、瀬戸大橋開通、北陸自動車道全線開通、東京ドーム開業など、インフラ整備が完成した年であり、また、バブル景気のまっただ中だった記憶があります。日本の名目GDPは、1980年に約247兆円だったのが、1991年に約479兆円と倍増した後、500兆円を挟んだ推移となり、2016年には約537兆円となっております。一方、アメリカの名目GDPは、1980年に約2.86兆ドルだったのが、1991年に6.17兆ドルとなり、2016年には18.62兆ドルとなっております。日本の名目GDPは、ドル換算で1988年にアメリカのほぼ半分だったのが、2016年にはほぼ4分の1となっております。平成の30年間で大きく差がついたこととなります。平成の30年間を分析し、次の30年に向けた戦略を十分に考えていく必要があると思います。

さて、昨年気になった科学ニュースと言えば、「チバニアン」です。地球の歴史で約77万～12万6千年前の年代が「チバニアン」（千葉時代）と命名される見通しになったというニュースは非常に興味深いものでした。正式承認までさらに3段階の審査があるようですが、まず間違いないとのこと。昨年の挨拶で、113番元素の名前が「ニホニウム（nihonium）」、元素記号が「Nh」に決まったニュースを取り上げましたが、命名に関するニュースに胸を躍らせるのは私だけではないと思います。

ところで、信州大学の近況について少し説明させていただきます。新しい時代に対応した博士人材の養成を目指すため、大学院博士課程の「医学系研究科」と「総合工学系研究科」を統合再編し、新たに「総合医理工学研究科」を平成30年4月に設置します。超高齢社会の医療・福祉を支える生命医工学分野の人材を育成するため、修士課程に新設した生命医工学専攻の学年進行に対応し、博士課程にも生命医工学専攻を設置します。新たな大学院教育の幕開けとなりますので、信州大学が一丸となって取り組んでいきたいと思っております。また、信州大学では、平成29年度から5年間の予定で様々なプロジェクトが始まっております。例えば、文部科学省就職促進プログラム：「かがやき・つなぐ」北陸・信州留学生就職促進プログラムでは、金沢大学と連携して、成長戦略における「外国人材の我が国企業への就職の拡大」に向けて取り組んでいます。文部科学省「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン：超少子高齢化地域での先進的がん医療人材養成（北信がんプロ）では、金沢大学（主管大学）、富山大学、福井大学、金沢医科大学、石川県立看護大学と連携して、がん医療の新たなニーズに対応できる優れた「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」を養成する取組を展開しています。文部科学省地域イノベーション・エコシステム形成プログラム：革新的無機結晶材料技術の産業実装による信州型地域イノベーション・エコシステムでは、「フラックス法による無機結晶育成技術」を用いた、高機能・低コストな無機結晶材料を核とした事業化プロジェクトを展開しています。JST産学共創プラットフォーム共同研究推進プログラム：生理学的データ統合システムの構築による生体埋込型・装着型デバイス開発基盤の創出では、「生理学的データ統合システム」を構築し、それを体系